

## 会長この一年

SPring-8 上坪 宏道

日本放射光学会の会長に選ばれてから一年が経ち、「会長この一年」として反省の一文を学会誌に書くことになった。これまであまり学会のことに熱心でなかったために、五里霧中で試行錯誤をしながら過ごしたこの一年であった。ここではこの間に経験したことや気付いたことを述べることにする。

会長がまず行なわねばならないことは幹事をお願いすることである。庶務幹事は近くにいてよく連絡の取れる人がいいとのことで、姫路工大の坂井さんをお願いし、ほかの幹事はなるべく共同利用施設の方をお願いする事にした。こうして、会計幹事を山本樹さん (KEK)、行事幹事を水木純一郎さん (SPring-8)、渉外幹事を宇理須恒夫さん (分子研) をお願いした。編集幹事は神谷幸秀さん (物性研) がこの一年間努めることになっていたの、次期編集幹事を尾嶋正治さん (東大工) をお願いした。各幹事の方々が大変よく仕事をしたので、私も何とか会長職を勤めて来られたと思っている。

最初の幹事会で、会計幹事から「学会の財政状態がだんだん悪化してきており、その健全化が緊急の課題である」との指摘があり、私たちの努力目標を「学会の独自性の確立と財政基盤を強化」にすることになった。そのための第一歩として、正会員および賛助会員を増やすことと会費の滞納を減らすことに努めることにしたが、これは初め考えたよりもずっと多くの問題を含んでいて、たいへんなことに手を染め始めたというのが、偽らざる実感である。

会費の滞納を減らすことは、会計幹事の努力と大部分の滞納がうっかりミスということもあって、かなりの成果を上げている。しかし会費の督促などにかかる経費や手間を省くために、会費の自動振り込みを会員各位をお願いしたい。

会員を増やすには放射光学会の会員であることのメリットを関係研究者に理解してもらうことが大切で、そのためには学会独自の活動を強化する必要がある。放射光学会の特色として、会員の多くは放射光を手段として利用し、学問的な成果はそれぞれ専門の学会で発表することが多い。このような状況が背景にあったとしても、なお、利用者の大部分に放射光学会の会員になってもらうには学会の活動に特徴を持たすことが必要であろう。例えば、現在急速に展開している、放射光利用研究に関わる実験装置や測定技術の最先端情報が常時得られ、また、実際にその分野で活躍している研究者と交流できる場を提供することなどが考えられる。いずれにせよ、放射光の利用が、21世紀にお

ける科学技術の展開に新しいインパクトを与えると期待されているので、放射光学会の活動がそれに応える必要がある。

今年開かれた「第六回放射光装置・技術国際会議 (SRI97)」では、幸い科学研究費補助金1100万円あまりが学会に対して交付され、本学会が大型国際会議に対して主体的に関与することが可能になった。今後は国際会議の企画や招聘に当たっても、放射光学会が積極的な役割を果たせればと思っている。また、年会・合同シンポジウムでも学術的な発表は年会として行い、各施設の集まりは施設毎の「利用者会議」として行われることが定着してきている。「年会での学術的な発表は学会員として行う」ことが、放射光関係研究者のあいだで広く受け入れられるようになり、年会が多くの研究者にとって国内では最も重要な研究発表と研究交流の場になることを期待したい。できれば正(学生)会員数を数年のうちに1500名までに増やせればと願っている。

賛助会員をふやすことも学会の財政基盤を強化する上で重要なことである。これまでに放射光利用研究に従事してきた研究者には企業関係者も多く、その数は今後さらに増えていくのではないかと予想される。ところで、共同利用施設や主要な大学は年会・合同シンポジウムの開催や国際会議の組織で学会活動に大きく貢献している。そこで企業側には賛助会員という形で学会活動をサポートして頂くのがいいのではと考えている。なお、今後放射光を利用した研究では、大学などアカデミックな組織の研究者と企業に属する研究者との間の壁が低くなり、その間の共同研究がますます発展すると期待される。放射光学会がその推進を果たすような活動を行って、企業側の理解と積極的な参加を求めることも必要になっている。

財政基盤の健全化には事務局体制の整備も重要事項の一つにあげられる。これまで事務局の仕事においても、特定の人々のボランティア活動に依存してきた面があった。この点の是正も私たちの検討項目になっている。

以上、これまでの幹事会などで議論したことをいささか独断的にまとめてみた。表現に舌足らずの面もあり、また、私をはじめ大部分の幹事が今回初めて放射光学会の運営に携わったため、経験不足と学会活動に対する理解の浅さからくる誤解も多いのではないかとおそれる。会員各位には忌憚のないご批判や積極的なご助言をいただき、あと一年、学会の発展のために少しでもお役に立つことができればと願っている。